

北の大地に根づく会津魂

校長 舘岡 靖哲

今年の「歴史的な暑さ」に比べて、今年の夏休みは比較的過ごしやすかった気がします。それでも熱中症の心配が尽きない日々が続きましたが、生徒に係わる大きな事故やトラブルもなく、無事に2学期を迎えることができております。この場を借りて感謝申し上げます。

夏季休業中も本校生徒の活躍が目立ちました。学校総合体育大会の県大会では、サッカー部が第3位、体操部が第9位、女子バレーボール部がベスト32、新体操では個人総合6位等、輝かしい成績をあげてくれました。今後は2学年を中心とした新チームの更なる活躍が楽しみです。

さて、さいたま市の自然の家が所在する福島県西部を会津地方（中心は会津若松市）と呼びます。この地には、会津の伝統的な規範意識を踏まえて、「会津に育つすべての子どもが、このような子どもに育ってほしい」という想いを示したものとして「あいづっこ宣言」が平成14年に策定されています。この宣言は、子どもの立場からは「このような子ども・会津人になります」という宣言ですが、また同時に、大人の立場からは「子どもたちの手本となり、このような子ども・会津人を育てます」という宣言でもあります。以下「あいづっこ宣言」です。

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 一 人をいたわります | 二 ありがとう ごめんなさいを言います |
| 三 がまんをします | 四 卑怯なふるまいをしません |
| 五 会津を誇り 年上を敬います | 六 夢に向かってがんばります |

やっではならぬ やらねばならぬ ならぬことは ならぬものです

江戸時代、会津藩では同じ地区に住む6～9歳の藩士の子どもたちは、「什」（じゅう）と呼ばれる10人前後のグループを結成しました。そこでの決まりを定めたものが「什の掟」（じゅうのおきて）です。あいづっこ宣言は、この「什の掟」の精神を受け継いだものです。

ところでこの夏、思わぬ場所で「什の掟」と「あいづっこ宣言」に出逢いました。それは、北海道の余市町（以下余市）です。私が余市に関心がある理由は、①さいたま市と同様に宇宙飛行士（毛利衛さん）が生まれ育った地である。②平成10年の長野オリンピックスキージャンプ団体で金メダルを獲得した斉藤浩哉、船木和喜、両選手が生まれ育った地である。③ニッカウヰスキーの創業者である竹鶴政孝とその妻リタをモデルとする『マッサン』（2014年NHK連続テレビ小説）の舞台である。④国内では類を見ない岩壁に刻画を残す洞窟遺跡（国指定史跡フゴッペ洞窟）がある。等々です。空港から電車で余市に着き、最初に訪問した余市水産博物館で目にした資料が、会津藩士と余市に係るものでした。幕末、戊辰戦争で敗れた会津藩士は、会津の地を追われました。明治4年、一部の藩士（193名）は北海道に渡り、現在の余市に開墾の鋤を下ろしました。彼らは子どもたちの教育のために、入植者用の住宅一軒を開放し、日進館（会津藩の藩校は日新館）を設立し、「什の掟」を含めた会津魂を継承したそうです。その後、この日進館は余市の学校教育の礎となりました。今年で入植155年を迎え、町内で「什の掟」や「あいづっこ宣言」のポスターを多く目にし、北の大地に根づく会津魂を肌で感じた旅になりました。

自分に甘えず、他者を思いやり、正しいことを貫く。このシンプルな教えを本校でも広めたいと考えています。 ※余市水産博物館の学芸員さんから沢山資料をいただきました。感謝申し上げます。